



2011年は「世界化学年」!

IYC委員会

世界化学年とは

2011年は「世界化学年」(International Year of Chemistry: IYC2011)である。これは、国際純正・応用化学連合(IUPAC)の呼びかけに賛同し、我が国が共同提案国として国際連合教育科学文化機関(UNESCO)に働きかけて、2008年末の国際連合総会において決定されたものである。2011年はIUPAC設立から100年目という化学にとって節目の年であり、またキュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目という記念の年でもある。ノーベル化学賞といえば、この「世界化学年」を前にした昨年10月、鈴木章・北海道大学名誉教授と根岸英一・米パデュエ大学特別教授がノーベル化学賞を受賞されたのは記憶に新しいところであり、我が国にとって「世界化学年」に向けて弾みのつくことであった。

「世界化学年」では、統一テーマ“Chemistry-our life, our future”の下、『化学に対する社会の理解増進』、『若い世代の化学への興味喚起』、『創造的未來への化学者の熱意ある貢献への支援』及び『女性の化学における活躍の場の支援』を目的として、化学に関する様々な啓発・普及活動が世界各国で予定されている(IYC2011世界化学年ホームページ(<http://www.chemistry2011.org/>)参照)。

日本の取り組み

我が国では、世界化学年の目的に沿っ

た活動を産学官が連携して推進するために、日本化学会をはじめとする化学系学協会の協力の下、「世界化学年日本委員会」が2010年8月に設立されている。この委員会は、事業企画の方針決定などを担う「企画委員会」と、事業の立案・実行や既存の化学関係団体事業の強化・支援を担う「実行委員会」から成る。世界化学年日本委員会事務局では、化学関係団体事業のうち世界化学年の目的に沿った事業を「世界化学年」事業として登録し、「世界化学年」共通ロゴを使用してもらうことを化学関係団体に依頼している。

日本化学会の取り組み

日本化学会は、2010年5月に「IYC委員会」を組織して、「世界化学年」に向けた準備を進めてきており、「世界化学年」オリジナルの新規事業として、現在のところ「世界化学年記念シンポジウム」と「見せる化学・魅せる化学展」を計画している。

「世界化学年記念シンポジウム」は、2011年最初の「世界化学年」オリジナル新規事業として、春季年会初日の3月26日に予定されている企画である。「化学が未来をリードする条件は？」と題して、産学の代表二人による基調講演及び日本化学会論説委員会の産学官の委員を交えたパネル討論会を計画している。このシンポジウムを通じて、化学の魅力や社会貢献、そして将来に向けた化学界の

意欲を、社会に発信していきたいと考えている。

「見せる化学・魅せる化学展」は、科学館に化学をテーマとした展示物が非常に少ないという現状を打開すべく、「世界化学年」を契機に多くの知恵を結集して化学の常設展示物を考案し、科学未来館の協力の下で展示会を開催しようというものである。昔から、化学が“これぞ!”という新しい技術や素材を創り出し世に問うことで、時代の進歩に大きく貢献してきたことは疑いのないところだが、その貢献や化学の持つ面白さ、不思議さ、素晴らしさは、果たしてどれほど世に理解されているだろうか。最先端のエレクトロニクス製品や電気自動車の中に詰まっている化学の恩恵が一般には理解され難いという現実を、変えていきたいと思う。科学館を訪れる方々、特に若い世代の人たちに、たとえ化学に馴染みは薄くとも、化学の持つその素晴らしさ・魅力に触れていただくことが何より大切だと考える。

おわりに

繰り返す述べるが、この世界化学年を契機として、化学の持つ素晴らしさをさらに強く何度も発信することで、化学に対する社会の理解増進を、そして若い世代の化学への興味喚起を図り、輝かしい未来を創造していこうではないかと。

〔日本化学会副会長・IYC委員会委員長
千葉泰久(宇部興産株式会社)〕

© 2011 The Chemical Society of Japan